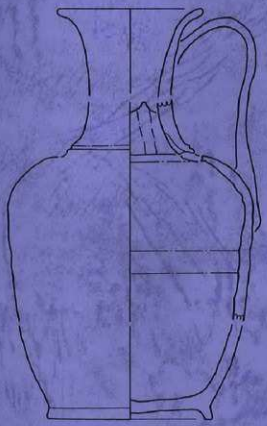
長野県木曽郡大桑村

ゆみやへいわとう

弓矢平和塔遺跡

――平和公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告書――



1996年3月

大桑村教育委員会

木曽郡町村会

長野県木曽郡大桑村

ゆみやへいわとう

弓矢平和塔遺跡

―― 平和公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告書 ――

1996年3月

大桑村教育委員会
木曽郡町村会

遺跡遠景（南西上空より）

緑釉水注（既出品）

序

大桑村では終戦50周年にあわせて、平和塔周辺の整備を行うことになりました。この付近からは以前より土器などが見つかっており、遺跡があることが知られていました。

工事に先立って用地内の遺跡を発掘し、記録として後世に残すために調査が行われました。

その結果、平安時代の住居址が一軒発見され、その中から灰釉陶器と呼ばれるお碗や皿など、当時の食器が出土しました。遺跡が小高い山の上にあることなどから、何か特別な意味を持つものではないかと思われ、大変興味深い物であります。

村では、今回発掘調査を行った弓矢平和塔遺跡を含め、平成３年度から７遺跡の緊急発掘調査を実施してきました。

しかし本格的な調査報告書の刊行を見たのは、昭和62年度の大明神遺跡の発掘調査報告書以来のことです。このことは埋蔵文化財の保護に対しての村の取り組みの強化が求められているところであります。

ここに調査の成果をまとめ刊行に至ったことは、調査の指導をいただいた木曽郡町村会の皆様、多大なご協力をいただいた地元の作業協力者の皆様の献身的な作業のたまものです。

今後は今回の調査の成果を埋蔵文化財の保護の発展に生かすとともに、多くの方々に郷土の歴史についての関心を持っていただき、地域作りへとつなげてゆきたいところです。

この度の調査に際し、ご指導いただきました先生方、作業にご協力いただいた方々、地権者をはじめ関係地区の方々、県教育委員会など関係機関の皆様に感謝と敬意を申し上げ、序文といたします。

平成８年３月

大桑村教育委員会
教育長　田中達也

例　　言

1　本書は平成７年度に実施された、長野県木曽郡大桑村長野903-13、38番地付近に所在する弓矢平和塔（ゆみやへいわとう）遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2　この遺跡の従来の名称は弓矢遺跡であったが、弓矢地区内の別の遺跡と混同される事があったため、表記の名称とした。

3　調査は公園整備に伴う緊急発掘調査であり、大桑村が木曽郡埋蔵文化財調査実施要綱により木曽郡町村会に委託して調査を行った。

4　本書の作成に当たっての諸作業は、既出以外の土器実測を竹原久子・松尾明恵、石器実測を松原和也、既出土器の図化の一部を大戸美恵子・久保寺すみ子・徳原とら子、遺物写真撮影の一部を羽根田　始が行い、他は新谷和孝が行った。執筆は第１章を羽根田、他は新谷が行った。

調査・整理作業に当たっては、大竹憲治、小口達志、小林康男、小松　学、田口昭二、竹内靖長、竹原　学、直井雅尚、永井節治、原　明芳、平林千晴、水澤幸一の諸氏より多くのご教示・ご指導をいただいた。

また大桑村の長岡　始助役、教育委員会事務局、役場職員の上田輝幸、木下文彦、久保峰俊、熊藪春美、坂家重吉、須賀幸弘、戸前恵子、西沢正樹、沼田広明、野知里由明、畑中正信、藤山裕子、家才子明一、山田哲也、地元の今井郁男、漆平和子、梶谷光雄、木下武子、貴舟宏平、志波克己、田口鉄一、滝沢保男、長岡悦子、中平鶴清、西沢義樹、藤山まさ子、南山浦太郎の諸氏、地権者の方々、大桑小学校の方々には、調査や整理の過程で多くのご支援・ご協力をいただいた。記して感謝申し上げたい。

5　委託契約書等の文書類は調査結果の記載を重視したため、本書には収録していないが、出土遺物・図類とともに大桑村教育委員会が保管している。

既出遺物は大桑小学校・新谷が保管している。

調査体制

調査担当者　新谷和孝（木曽郡町村会埋蔵文化財保護担当）

補　助　員　松原和也（同上）

協力者・機関

上田東衛門・細田　登（地権者）

大戸美恵子・桶野菊男・久保寺すみ子・坂家宗市・坂家正夫・下野菊江・徳原とら子・名小路芳雄・場作近子・羽根田義造・藤懸　薫・洞野好男（調査・整理作業参加者）

長野県教育委員会・㈱宮地組・㈱ジャスティック・大桑村遺族会・村田広司

事務局　大桑村教育委員会

教育長　田中達也　　次　長　下野昌一

係　長　羽根田始　　主　査　古谷賢一　　主　任　西八千代　　主事補　下野憲一

本文目次

口　絵
序
例　言
目　次
第1章　調査に至る経過……1
第2章　遺跡の位置と環境……3
第3章　調　　査……8
　1　調査の方法……8
　2　基本層序……8
　3　調査の結果……8
　4　既出遺物……13
第4章　調査の成果……20
　1　縄文時代晩期～弥生時代をめぐって……20
　2　平安時代をめぐって……21
　3　遺跡の立地をめぐって……22
写真図版……25

図目次

第1図　遺跡の位置……2
第2図　調査位置……2
第3図　平和公園とその周辺……5
第4図　弓矢平和塔遺跡全体図……7
第5図　第1号住居址……9
第6図　第1号住居址遺物出土状態……11
第7図　平安時代の土器……12
第8図　縄文時代晩期～弥生時代の土器(1)……14
第9図　縄文時代晩期～弥生時代の土器(2)……15
第10図　石　器……17
第11図　県内出土の緑釉水注……19

第１章　調査に至る経過

大桑村では終戦50周年に合わせて、平成６・７年度に長野弓矢地区にある平和公園の整備事業を行うことになった。事業は平成６年度に公園に至る道路（村道平和公園線）を新規に開設し、７年度に公園周辺の整備を行うこととした。

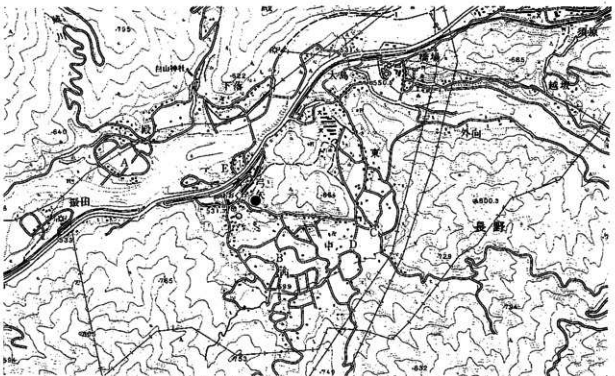
この公園に近接する付近では、以前より遺跡の存在が知られており、事業予定地内でも平和塔北東側の公園を新規に造成する部分に遺跡が存在することが予想された。この部分は遺跡の中心の平坦部から南西に向かって下る緩斜面で、ヒノキが植林されており、地表での遺跡の確認は不可能であった。

事業に先立って保護協議を実施した結果、平成６年度の道路工事終了後に事業地内の遺跡の確認調査を実施し、それに基づいて事業地内の遺跡の保護措置を行うこととした。

これを受けて事業地のヒノキの伐開終了後の平成６年１月12日に試掘調査を行った。その結果住居址と思われる落ち込みが確認され、その部分から灰釉陶器が出土したため、事業地内に遺跡が存在することが確認された。これを受けて協議を行った結果、工事に先立って発掘調査を行い、遺跡の記録保存をはかることとした。

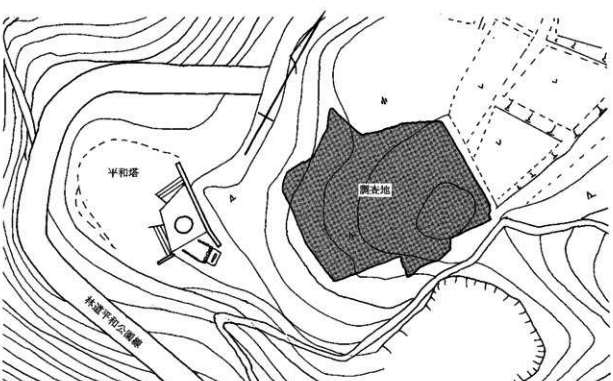
文書記録

平成６年11月29日	大桑村役場建設課より村教育委員会に埋蔵文化財について照会。
平成６年12月15日	弓矢平和塔遺跡について保護協議。
平成６年１月12日	試掘調査実施。同日、村建設課と再協議実施。
平成７年２月10日	大桑村より埋蔵文化財発掘の届出（57条２－１）。
平成７年３月10日	大桑村教育委員会より埋蔵文化財発掘調査の通知（98条２－１）。
平成７年４月６日	木曽郡町村会宛　埋蔵文化財発掘調査指導及び技術指導について協議書提出。
平成７年４月６日	木曽郡町村会と埋蔵文化財発掘調査指導及び技術指導委託協定書締結。
平成７年４月６日	発掘調査、整理作業開始（～11月30日まで）。
平成７年４月19日	㈱ジャスティックと埋蔵文化財発掘調査に伴う測量調査委託契約締結。
平成７年12月14日	木曽郡町村会宛　埋蔵文化財発掘調査報告書作成業務について協議書提出。
平成７年12月14日	木曽郡町村会と埋蔵文化財発掘調査報告書作成業務委託協定書締結。
平成７年12月14日	発掘調査報告書作成業務（～１月12日まで）。
平成８年３月31日	発掘調査報告書刊行。



第１図　遺跡の位置（1/25000・大桑村管内図使用）

●弓矢平和塔遺跡　Ａ大明神遺跡，Ｂ薬師遺跡，Ｃ善光寺遺跡，Ｄ名小路遺跡，Ｅ弓矢飼育所遺跡



第２図　調査位置（1/600）

第２章　遺跡の位置と環境

弓矢平和塔遺跡は大桑村長野地区の中心部にある中山（なかやま）西端部に所在する。中山は周辺の山塊から独立しており、その回りを取り巻くように長野地区の集落が分布している。中山の西端には山頂から一段降りた尾根の上に、東西約30ｍ、南北約30ｍほどの平坦面があり、そこから回りの斜面にかけての部分が遺跡となっている。

平和公園はこの遺跡のある平坦部から南西に30ｍほど下った尾根の先端にあたる。平和塔建設の際に造成された20ｍ四方の小さな平坦面があり、その周辺は急な斜面になって落ちている。平和塔の建設以前には南西に向かって下る緩い斜面となっており、畑として利用されていた。この部分は平和塔建設の際に造成されていて、地表が構造物のコンクリートや芝で覆われていたため、遺跡の存在については確認することができなかったが、地権者の方によればかつて畑として利用されていた際にも赤土が露出していたとのことで、遺跡があったとしても包含層などは耕作などの際に失われていたものと思われる。

平和塔は太平洋戦争後の世界平和と、大桑村の各地区の融合を祈念する象徴として、昭和30年に作られた高さ７ｍほどの塔で、周辺は20ｍ四方弱の小さな公園になっていた。塔の完成後、村や遺族会による平和祈念式、戦没者の慰霊祭が毎年行われていたが、終戦から33年目の昭和53年以降は塔の所ではなく、村内の各寺院で慰霊祭が行われるようになっていた。平和塔はその後遺族会による清掃などの作業が行われていたが、塔の周辺の公園の痛みが目立つようになり、また周辺の樹木の成長により回りからも見えなくなっていた。塔のある公園まで登る道が急であることもあって訪れる人も少なく、荒れた静かな場所になりつつあった。

今回の調査地は遺跡の中心部の平坦面から南西の平和塔に向かう側の斜面にかけての部分で、予想される遺跡全体の規模の約４分の１を調査した。今回の調査地付近からは、長野地区の南から西にかけてや弓矢地区のほぼ全体、木曽川の対岸の殿地区の全体などを見渡すことができる。平和塔が作られる際も村の多くの場所から見ることができ、容易に登れる場所ということでここが選ばれている。木曽川側から吹き上げる風と、南側の山から吹き下ろす風がぶつかる場所にあたり、風の向きは安定していないが、陽当たりは非常に良い場所である。

今回の調査地から北東に50ｍほどの、中山の弓矢地区側から登った所の平（第３図Ａ）には、明治33年から大正15年まで大桑小学校があり、遺跡の周辺は当時学校の農園として利用されていた。その後も遺跡周辺の平坦部は農地として利用されている。小学校があった付近は現在はゲートボール場や畑、山林となっているが、建設の際に造成された平坦面の名残が認められる。遺跡の周辺は大きな地形の改変はなく、本来の緩い斜面の地形をそのまま農地として利用している。また調査地の北側の尾根の頂部から斜面に移行する付近には、昭和の前半頃に藤棚とあずまやが作られていたことがあったが、この痕跡も段状の地形として残っている（第３図Ｂ）。

今回調査を行った部分は、戦時中から終戦後にかけて芋などが作られ、その後は桑が植えられていたが、昭和46～47年頃にヒノキが植林され現在に至っている。調査地の南東側は浅い谷状になっているが、この部分（第３図Ｃ）は大正12年７月18日の大水害の際に崩落したもので、現在でも調査地の東側の山林内で、この崩落の端部を観察することができる。本来は崩落した部分から東側に向かって続く浅い谷状の地形だったようで、今回の調査地からは東側に向かって緩い斜面が続いていたものと思われる。この時の崩落では小学校に退避するために斜面を登っていた家族５人が生き埋めとなり、うち２人が亡くなっている。

また昭和13年７月５日には、前述の旧小学校のグラウンド部分が崩落し、３軒の家が潰されて３人が亡くなっている（第３図Ｄ）。これは校地造成の際、図中に点線で示した浅い谷状の部分を埋めていた土が崩落したもの

で、現在でもその痕跡は明瞭に残っており、現地には供養の地蔵が建てられている。このほかにも中山の周辺にはさまざまな規模の崩落の痕跡が、図中に示したものをはじめ各地で観察することができる。

遺跡の周辺の基盤は木曽谷南部に普遍的に見られる花崗岩で、中山自体がその塊であり風化が進行している。このことが、前述の崩落の要因であるが、これは花崗岩自体が石英・長石・雲母の結合した岩石で、岩石内部での結合力が強くなく、特に形成時に表面に近い部分で急激に冷却されたものではこの傾向が強いことにもによる。

また木曽谷南部は国内でも有数の降水量の多い地帯で、その浸透や冬季間の凍結も、基盤の花崗岩層の崩壊を進めている要因の一つとして指摘できる。

遺跡のある中山の西端部付近では、基盤の花崗岩層の上に約50000年前のものとされる木曽川泥流層がかぶり、さらに泥流以後の火山活動により形成されたローム層が乗り、その上に黒色土が形成されて現在の地表面になっている。

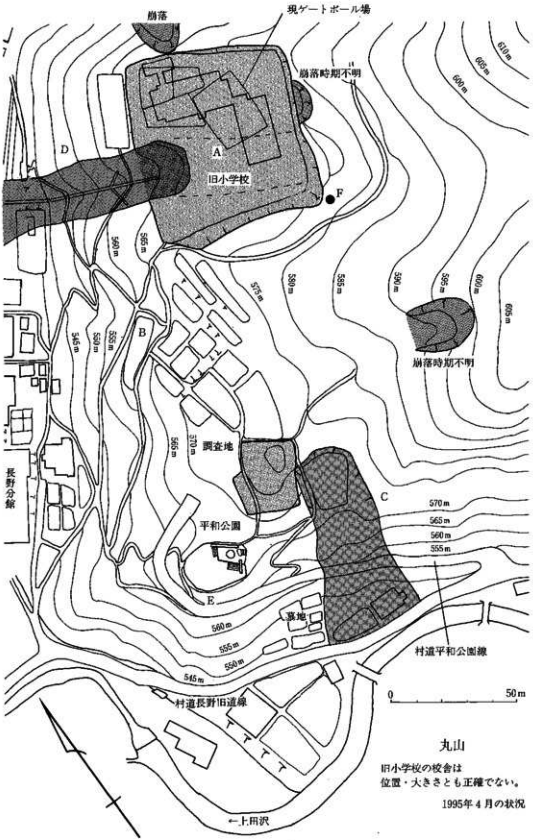
木曽川泥流層は、御岳の火山体の崩壊によって生じた大規模な土石流で、木曽川に沿って流れており、先端は愛知県付近まで達している。村内ではこの形跡は人頭大の礫を多量に含む層として残っており、和村地区の木曽川に面した崖や、大桑中学校付近の崖面、本遺跡と木曽川を挟んで対岸にあたる殿地区の木曽川に面した崖面などで観察することができる。平和塔付近のものは木曽川に沿って流れた泥流の端に近い部分に当たり、小さな丘陵状の地形だったと思われる中山に、北側を東から西に流れた泥流の端が被るようにかかったものと推定される。今回の工事が行われる前にも平和公園に登る山道で、泥流の礫層が断片的に観察されていた（第３図Ｅ付近）が、工事で公園に登る道路が作られた際に行われた切り取りで、現在の平和公園の地表面から３ｍほど下にこの層が拡がっていることが確認された（口絵図版参照）。周辺では南西側を流れる上田沢を挟んだ対岸にあたる丸山の、上田沢に近い部分の崖面でもこの礫層が観察される。これらの分布状況を見ると、丸山・殿と平和塔付近の礫層には20ｍ近い標高差があり、泥流が流れた後に断層活動により中山が隆起して現在の地形が形成されたことが伺える。この断層活動の時期は確定されていないが、本遺跡や同地区内の弓矢飼育所遺跡の存在や、その立地などから縄文時代以前には中山が隆起して現在とほぼ同様の地形が形成され、その後周辺部などで前に挙げたような小規模な崩落が繰り返されているものと推定される。断層の位置は現在の集落の形成などにより明確ではないが、中山の北西側の山裾付近に存在することが予想される。

泥流層の上に堆積した火山灰により形成されたローム層は、軟質の部分は調査地の北西部では上面から約１ｍほどの厚さで堆積しており、その下はスコリアを多量に含む硬い層になっている。調査地が斜面にあるため、調査地の中でも基盤層の状態は場所によって異なっており、東側の部分では、花崗岩が風化した砂の層が表面に露出しており、住居址の検出された付近でロームの下に潜り込むようになっている。

（本項中の地質学的な所見については、永井節治氏よりご教示を得た。誤認等の責は筆者にある。）

湧水は遺跡周辺の尾根上の平坦部では、かつて小学校があったゲートボール場付近にあるのみで、遺跡とほぼ同じ高さにあるが、直線距離で80ｍほど離れている。この湧水（第３図Ｆ）は近接する河川などより高い場所にあり、水源は中山に降った雨の浸透したものと推定され、近年でも夏の乾燥の激しい時期には水量の減少や枯渇があった。近年では湧水量が少なくなっているが、小規模な集落で使うには充分な量があったものと思われ、遺跡に居住した人々はこの湧水や、山を下った上田沢の水を利用していたと思われる。中山自体には地下の水脈が多くあり、周辺の集落では山裾からの湧き水を利用している場所も多い。平和公園の造成時にも、今回の調査地の西側をカットした部分から湧水が見られ、現在も公園内の擁壁から水が湧出している。

周辺の山林は、現在では針葉樹が植林されている部分が多いが、本来は広葉樹の雑木が多かったようである。クリやドングリなども多く、秋にはアケビなども採ることが可能である。



第3図　平和公園とその周辺（S＝1/1500）

弓矢平和塔遺跡の存在が知られるようになったのは、戦後になってからで、小学校があった頃に農園として利用されていた付近の畑を耕作していた際に石器などが採集されている。採集された方が亡くなっているため当時の詳しい状況は確認できないが、その一部は現在も保存されており、本書にも写真を掲載させていただいた。

昭和30年代後半には耕作の際などに出土した遺物の一部が、大桑小学校の社会科資料室に収蔵されている。こちらも当時採集された方を特定することはできなかったが、収蔵後の混乱により明らかに混入したと判断されるものを除くと、弥生時代中期の土器片と石器製作時の剥片が各10点、緑釉陶器の破片が1点、灰釉陶器の破片が20点ほどと、現代の陶器片数点がある。その中で注目されたのは緑釉陶器の破片で、瓶類の到部下半の約6分の1ほどの小片であるが、当時は県内でも出土例が少なかったこともあり、貴重な遺物として認識されてはいた。しかし機種や部位の特定ができない状態であり、正式な報告は行われておらず、遺跡の内容も明らかにされてはいない。昭和56年に刊行された『長野県史』考古資料編の遺跡地名表では縄文時代早・後期の遺跡とされているが、今までにこの時期の遺物は出土していない。これは同じ地区の弓矢飼育場遺跡と混同されたことと、遺物の時期を誤認していたものであることが小学校に保管されている箱のラベルなどから推定される。弓矢平和塔遺跡の存在が報告されたのは、この地名表が最初だが、大桑村の部分では平安時代以降の遺跡についての記述は欠落しており、緑釉陶器などについても記載がない。

村では昭和30年代以降何度かに渡って、中学校のクラブ活動などで村内の遺跡での表面採集などが行われているが、この遺跡は規模が小さく、また拾える遺物の多くが灰釉陶器などであるため、それらの際にもあまり注目されなかったものと思われる。

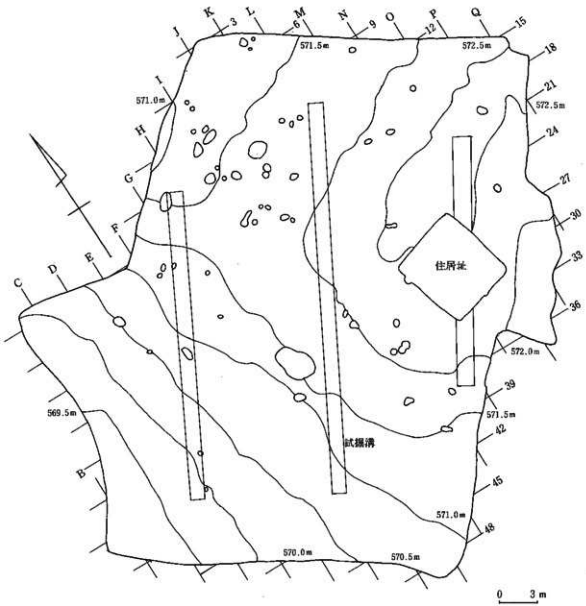
昭和50年代以降、筆者はこの遺跡で表面採集を繰り返しているが、現在までに採集した遺物は縄文時代晩期から弥生時代中期のもの、平安時代中期から後期のもののみであり、この遺跡ではこの二つの時期に人の生活があったことが判明している。

平安時代の遺物のうち灰釉陶器については、昭和60年の大明神遺跡の発掘調査後の整理の際、多治見市教育委員会の田口昭二先生にご指導をいただき、美濃古窯の大原2号窯式期から西坂1号窯式期まで各段階の物が出土していることが明らかになった。これについては同遺跡の報告書で周辺遺跡の地名表に記載している。

遺跡の規模は非常に小さいが、長い時期に渡って人の居住があったことを伺わせる遺物が出土しており、注目されるものである。

中山は北端部の高くなった部分を兼平山（かねひらやま）といい、木曽義仲の四天王の今井四郎兼平に由来するという伝説がある。この兼平山の山頂には石を敷いた遺構があるほか、中山の東側の山頂の愛宕山と呼ばれる付近にも同様の遺構が確認されている。大桑小・中学校がある山の北東側の一帯を中心に、それらに関する伝承が多く残されているが、その実態は不明な点が多く、今後の調査による解明が待たれている。平和塔のある西側の部分は立地などから山城等が存在しても良いと思われるが、それらについての伝承はなく、また耕作や平和塔の造成等により原地形が失われているため確認できない。今回の調査で検出された遺構や遺物及び、過去に採集された遺物の中にもそれらとの関連を伺うことができるものはない。

大桑村は古代末から中世の木曽の中心の一つであったとされ、建造物や近年の発掘調査の成果にその一端を伺うことができるものはあるが、実体は明らかでない部分が多い。伝承などが安易にそれらと結びつけられ、真の姿とは異なった歴史が語られている部分も多いと思う。これらについては今後さらに究明を進めて行きたい。



第４図　弓矢平和塔遺跡全体図（Ｓ＝1/300）

国家座標Ⅷ系
Ｑ－15：Ｘ－35092.00m，Ｙ－75110.00m
Ｂ－33：Ｘ－35104.00m，Ｙ－75140.00m

第3章　調　　査

1　調査の方法

調査に当たっては、試掘の際に過去の耕作等により包含層などが失われていることが判明していたため、ヒノキの伐採後に重機を使って表土や表面に残った木の枝などを除去して基盤層の上面まで掘り下げた後、人力による遺構の検出を行った。検出された遺構は、覆土の状況を確認しながら掘り下げて記録を行った。また尾根の頂部の平坦で軟質のロームが基盤となっている部分では、旧石器時代の文化層の確認調査を行ったが、存在しないことが確認された。調査面積は570m²である。

測量用の基準点の設置と、写真測量による平面図（1/20）の作成及び景観写真の撮影は㈱ジャスティックに委託して実施し、細部の記録は手書きによる測量を併用した。

2　基本層序

今回の調査地は、傾斜地にあるため表土の黒色土の堆積は頂部の平坦部分でも20cm弱の厚さである。調査地は過去の耕作等により自然の堆積がほとんど失われており、自然堆積が残っていたのは、調査地の北側の一部のみで、他は基盤のロームや花崗岩の風化した砂層の上に、直接表土の黒色土が被っている部分が多かった。基盤層は調査地の北東側の高くなった部分では花崗岩の風化した砂質土が表面に露出しており、他はその上に堆積したロームが基盤になっている。

3　調査の結果（第4図）

今回の調査では平安時代の住居址1軒と、時期不明の土坑が検出された。

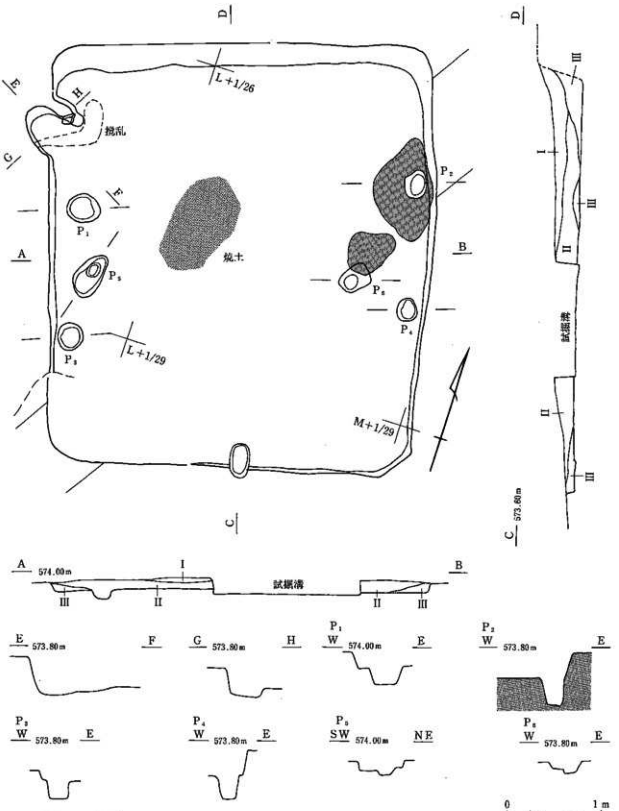
A　平安時代の住居址（第1号住居址）（第5図）

調査区の東部で検出された。試掘の際にトレンチが中央部に掛かって存在が確認されていたもので、南北の対角線にトレンチが掛かっている。

プランは南北4.5m、東西4.1mの隅丸長方形で、主軸はN-19°-Wである。斜面に掘り込まれているため、南側の壁の残存状況は良くないが、他は木の根などによる攪乱がわずかにある以外は残存状況は良好で、自然堆積により埋没している。北西の角の部分は木の根による攪乱と、この部分で基盤層が花崗岩の風化した砂からロームに変化しているため、壁の確認が出来ず、やや掘りすぎてしまっている。周溝は検出されていない。

床は基盤の花崗岩の風化した砂質土が大半で、南側はロームである。ほぼ平坦で硬くしまっている。貼り床などは認められなかった。

柱穴は東西の壁の中央付近のP_1～P_4が主柱穴で、主軸線を挟んでほぼ対称になる位置に掘られているが、P_1は北西の奥にカマドがあるため、やや内側に寄っている。いずれも住居の覆土と同じ土で埋没しており、柱痕が認められたものはない。P_2は基盤層中の風化した花崗岩に掘られており、この部分は床と壁もこの花崗岩を削って作られている。またP_6も一部が花崗岩を削って掘られている。花崗岩自体は風化が進行しており大変脆くなっていた。4本の主柱穴の中間にP_5・P_6の二つの穴がある。主柱穴より浅いが、住居の構造に関連するものと思われる。



Ⅰ：黒色土　（表土）
Ⅱ：黒色土　黄色土を多く含む。
Ⅲ：黄色土　砂を多く含む。
柱穴内は、いずれも住居覆土のⅡ層で埋没。

図中の座標値　L＋1/26は、X軸が全体図のLから東へ1mを示す。

第5図　第1号住居址（S＝1/40）

カマドは北西側の奥壁部で検出された。この部分は後世の木の根などによる攪乱が著しいため、残存状態は非常に悪く、焼土などは残っていない。壁から外に張り出した掘り込みがあり、構造材の一部と思われる焼けた石（すべて花崗岩）がまとまっていたのでカマドの残骸と判断した。

床面の中央西寄りでは焼土が検出された。床の上面から5cmほどの厚さがあり、非常に良く焼けていた。この周辺からは灰釉陶器の破片がまとまって出土している。鍛造剥片や鉄滓は検出されておらず、この焼土の性格は不明である。

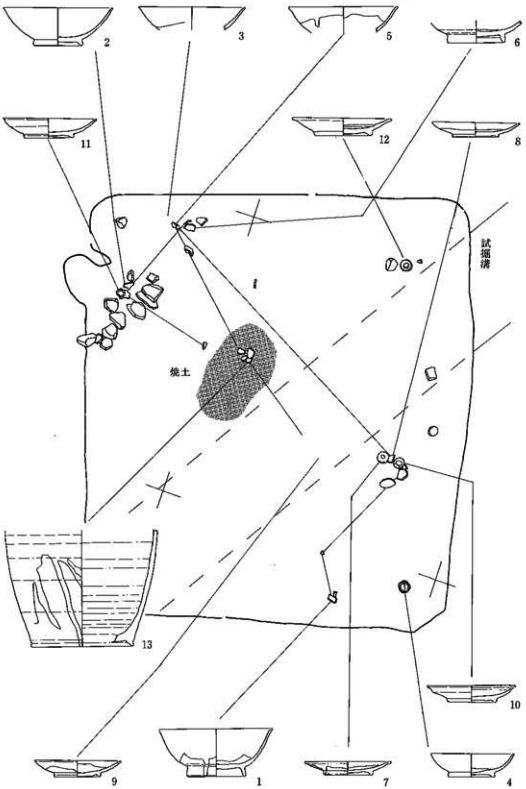
遺物は床面の直上から灰釉陶器の碗・皿などが、完形もしくはそれに近い状態でまとまって出土した（第6図）。試掘の際にも完形の皿（第7図9）が出土しているが、これも同様の状態にあったものと思われる。器形が復元できて図示したもの以外は、破片が数点あるのみであり、特異な残存状況であると言える。

遺物の分布状態を見ると住居址北西側のカマドから中央部の焼土周辺と、東側の壁に近い付近に集中が見られる。両者の間で破片が接合したのは8のみで、他はそれぞれのグループの中で接合している。5・11の2点はカマドの周辺と中央付近の焼土から出土した破片が接合しているが、いずれも床に近い部分から出土しており、住居址が埋没する際の堆積に伴う壁の崩壊などの土の移動を考慮しても、それらの土砂の流入や移動に伴って動いた物ではなく、廃絶時に意図的に置かれた物と思われる。

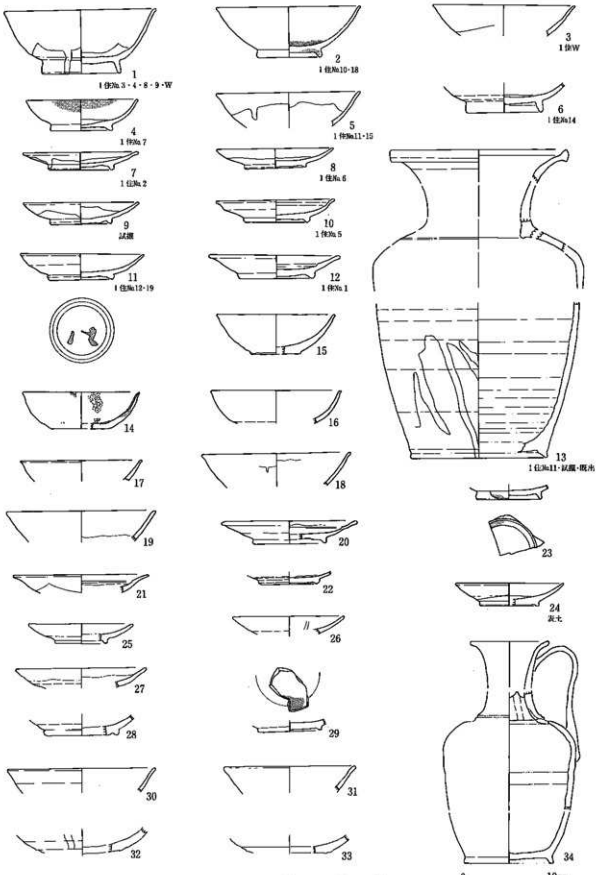
1は碗で調から口縁の一部を欠く。胎土に直径2mm程度の長石の粒を多く含んでいる。2は内面の見込み部分に朱墨と思われる薄い付着物があり、この部分の内面が磨滅している。朱墨硯に転用されたものと思われる。また高台の内面と、それに続く破損面には墨と思われる付着物があるが、こちらには転用硯などとして用いられた痕跡はない。3は内側の全面に厚く釉が掛かって表面が斑状になっている。外面の釉は口縁付近が大きく剥落している。4は口縁の内外面と高台に墨と思われる付着物がある。転用硯などとして用いられた痕跡はない。5は口縁の内外面に厚く施釉されており、表面が斑状になっている。6は内面の見込み部分に重ね焼きの際の付着物が見られる。7・9・11は完形で出土した。7は高台の作りが他に比べて角張っている。8は内面の中央部が磨滅している。墨などの付着は認められない。9は内外面に重ね焼きの際の痕跡が明瞭に残る。10は内面の中央部が磨滅している。墨などの付着は認められない。11も内面の中央部が磨滅している。外面の底部に墨書と思われる痕跡が見られるが、図では明瞭に見える部分のみを示した。このほかにも内外面に墨のような斑状の付着物と、それとは異質の黒い点のような付着物があるが、性格は不明である。12は段皿で内面の見込み部分が磨滅している。13は灰釉の広口瓶で、試掘時に出土した破片と、住居址の床面の焼土の周辺から出土した胴部から底部にかけての破片、それに過去の表面採集遺物中の同一個体と思われる口縁から頸部と肩部より復元実測した。試掘及び調査で出土した部分は接合の結果、大きな2つの破片となり、合わせて全体の3分の1弱である。口縁部は全体の約7分の1の破片のほか小片が2点、頸部と肩部はいずれも小破片である。口縁から頸部の内外面と胴部の上半に灰釉が施釉され、頸部の下半から肩部にかけては厚くかかっている。外面の胴部下半は釉が流れており、内面底部にも口縁側から落ちた釉が斑状に残っている。

住居址内から出土した灰釉陶器は広口瓶を除くすべてが食膳具で、煮沸具は破片を含めて1点も出土しておらず、過去に表面採集された遺物の中にもない。他に鉄製品が1点出土しているが、覆土上部の表土に近い部分からの出土のため、耕作等の際に混入したものと判断して図示していない。

本址の時期は出土遺物より美濃古窯の虎渓山1号窯式期に位置付けられる。長野県埋蔵文化財センターによる松本平の集落遺跡群の調査成果により対比される実年代（小平　1990）では10世紀中頃～11世紀中頃である。



第６図　第１号住居址遺物出土状態（S＝1/40）
遺物No.は第７図に対応・試掘溝内の９・13の出土位置は推定



第７図　平安時代の土器（S＝1/4）

出土位置の記載のないものは既出品、34のみ緑釉、他は灰釉

B　土　　坑

今回の調査では調査区のほぼ全域より検出された。調査に当たっては覆土を半截して掘り下げ、断面の土層を観察して記録した後に完掘した。

ほとんどは耕作の際の攪乱等によって生じたもので、人為的に掘られた土坑と判断されるものは全体図に示した54基のみである。遺物を確実に伴うものはなく、覆土などでも時期を確定することはできなかった。ここでは全体図に位置を記録するにとどめ、個々の土坑についての記載は行っていない。

C　遺構以外から出土した遺物

今回の調査で遺構外から出土した遺物は非常に少なく、ほとんどが小破片で器形を復元できるようなものはなかった。図示できたのは条痕文土器の破片（第８図14・31）と灰釉陶器の皿（第７図24）のみである。いずれも表土剝ぎの際に調査区の北西部の表土中より出土している。詳細については既出遺物の項で触れている。

4　既出遺物

A　土　　器（第８・９図）

過去に300点ほどの破片が出土しているが、ほとんどが細片で器形を復元できるものはない。破片の中には胎土などから同一個体に帰属すると思われるものもいくつかあり、本来の個体数はあまり多くないものと思われる。器形が判別できるものも少ないが、いずれも薄か甕の破片と思われる。無文あるいは表面が剝落等によって荒れたものが多いが、文様などから時期を特定できるものと、ほぼ同時期のもので、明らかに時期が異なると思われるものはない。図示したものも小破片のため時期を確定できるものは少ないが、文様等により大別して提示した。

１～３は無文の口縁部である。１は口唇部の上面と外面を、接合後に指先で挟むようにして整形している。外面は下に向かって押さえられており、接合痕が線状に残っている。口縁は緩い波状になると思われる。２は口唇をナデで平坦にしている。外側の調整は剝落のため不明である。３も１と同様に外面の接合痕が明瞭に残る。

４はナデ調整の際、口唇の外側が張り出すようになっている。その下には斜めの条痕がわずかに見られるが、胎土に含まれる砂により器面が荒れているためはっきりしない。５は口縁の下にヘラ状の工具による２段以上の斜めの連続した沈線が施される。胎土の粒子は非常に細かく、石英や雲母の微粒子が含まれている。

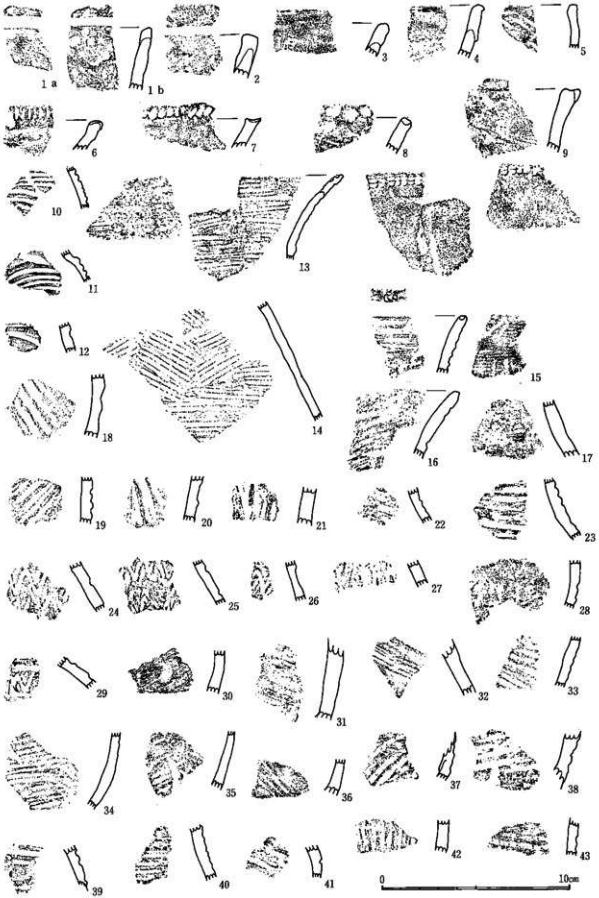
６は口唇を３と同様に整形した後に、工具の先端による連続した刻みを入れている。工具の種類は不明だが、先端は平らでなく段があるようである。７は連続した刺突が施されて口唇の幅が広くなっている。刺突は斜め上から行われており、工具の種類は不明である。

８は甕の破片で、口唇を指先で摘むようにして連続押圧している。窪んだ部分には爪の跡が線状に残っている。９は口唇部を指先で連続押圧している。２点とも体部には条痕が施されている。

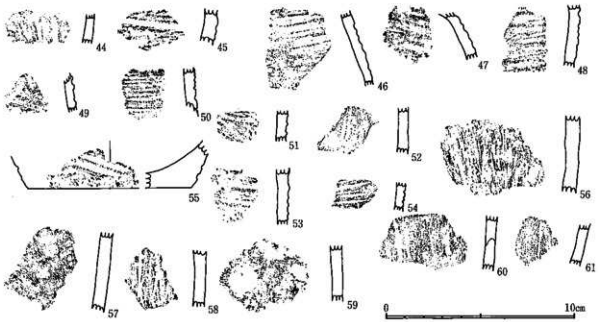
10～12は渦巻き状の浮線文が施される小型壺の破片と思われる。いずれも肩部の破片で、上半は横方向の沈線がめぐっている。10・11は半截竹管で施文している。

13・14は同一個体の壺の破片である。口縁は大きく外反して開き、内面に連続刺突がめぐらされている。この刺突は二つの楕円形のくぼみがつながっているが、原体は不明である。内面はナデ調整されている。頸部から口縁の外面は横方向の条痕が施される。肩部（14）は条痕が羽状の構成になり、その下は横方向になっている。この部分の内面はナデ調整されているが、小さな凹凸が著しく見られる。条痕は残存している部分では４条で１単位となっている。胎土は暗灰色で直径１㎜以下の長石・石英の粒子を多く含んでいる。

15は外面に荒い条痕、内面には細かい条痕が施され、口唇には半截竹管による連続刺突が施される。拓影の内



第8図　縄文時代晩期～弥生時代の土器(1)（S＝1/2）



第９図　縄文時代晩期～弥生時代の土器(2)（Ｓ＝1/2）

面に見られる縦の線は、繊維状の圧痕である。

16・17は外面に条痕が施される。いずれも内面は剥落が著しく、調整は観察できない。

18～21は同一個体の破片である。外面に荒い条痕が施されている。胎土の色調は明るい褐色で、石英・長石の直径１～数mmの粒子を多く含む。

21～28は同一個体で、肩部に波状文が施される壺である。21・22は頸部、28は胴部下半で、他は肩部の破片である。胎土の色調は暗灰色で、直径１mm強の長石・石英の粒子を多く含む。頸部の内面には成形時の指頭による調整の際の凹凸が明瞭に残る。29もこの一群と良く似ているが、器面の荒れのため同一個体か判断できない。

30は内外面にナデ調整が施されている。31は壺の胴部下半と思われる。胎土には直径２mm強の小石を少量含んでいる。32は外面に条痕が施される。胎土の色調は明褐色で石英・長石の微粒子を多く含む。９と良く似ており、同一個体の可能性が高い。

34～37は同一個体の壺で、いずれも胴部下半の破片である。胎土の色調は灰色がかった明褐色で、直径１mm以下の長石・石英の粒子を多く含んでいる。37の破損面では、成形時の接合痕が明瞭に観察できる。

33・38～55は条痕文が施される破片である。小破片のため部位・個体への帰属などははっきりしない。

56～61は外面に縦方向の削り調整が施される。個体への帰属は識別できないが、いずれも直径１mm以下の長石・石英の粒子を多く含んでいる。内面はナデ調整され、胎土に含まれる粒子の影響を受けた部分以外の表面は滑らかである。

これらの土器は縄文時代晩期末から弥生時代前期のものとして位置付けることができる。小破片のため確実でない部分もあるが、条痕文が施された一群はおおむね東海地方の水神平式土器に比定されるものであり、同心円状の浮線文が施される11～13や、縦の削り調整がみられる56～61はこの時期の中部高地の土器である。小破片が多いため両者の明確な比率は提示できないが、図示した程度、あるいは前者の比率がさらに高くなるものと思われる。１～３・６・７は位置付けがはっきりしないが、在地の土器に含められると思われる。水神平式土器に比定されるとした一群は胎土や調整が異なるものが存在することから、東海地方から搬入されたものと在地で模倣されたものの両者が存在すると思われるが、東海地方の資料を実見した機会が少なく、両者の区分を明確にする

ことはできなかった。

土器の胎土を見るとこの時期の東海地方の土器と同様に、直径1～数mmのやや粗い石の粒子や砂粒が含まれていることが特徴といえる。肉眼で観察した限りであるが、含まれているのは長石・石英・雲母が多い。これらは木曽谷の南部の基盤層である花崗岩から得られるもので、風化した花崗岩やこの付近の断層の摩擦面で生じた粘土の中には普遍的に見られるものである。従って在地で作られた土器の素材（粘土及び混和剤）の供給源が、遺跡の近くにある可能性は非常に高い。これについては今後胎土の分析などの調査を行い、明らかにして行きたいと思う。

B 石　器（第10図）

過去に出土した石器のうち、現在所在がわかっているもの13点を図示した。図示できなかった剥片などを含めても量は100点に満たない程度であり、非常に少ない。

石鏃（1～8）は形態から二等辺三角形で基部に舌状の張り出しを持つもの（1・2）、肩が張る五角形で基部に舌状の張り出しを持つもの（3～5）、三角形で両側縁に抉りが入るもの（6・7）、二等辺三角形で基部の抉りが深く、側縁がネズミ歯状のものの4種類に分類できる。全般に小型で両側縁に抉りが入るタイプ以外は厚みもない。

ほぼ同時期の遺跡である松本市石行遺跡（関沢ほか1987）、茅野市大悦遺跡（石瀬1995）などの石鏃と形態的には同様の傾向を示している。

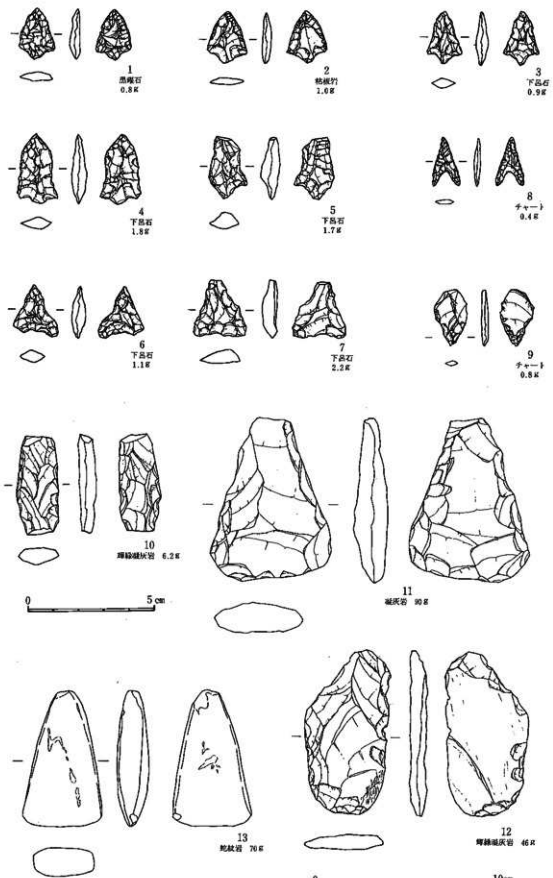
石錐（9）は小型の剥片の一端を加工して錐としており、先端が欠損している。10は大桑村周辺の遺跡で縄文時代の打製石斧の素材として多用される輝緑凝灰岩を素材とし、両側縁を調整している。打製石斧としては小型であり、両端部が欠損しているため本来の形態や用途は不明である。11は打製石斧で一端が欠損している。図で下側とした方の端部には使用による磨滅は認められない。12は刃部に使用による磨滅が認められる。素材が軟質のため、稜が磨滅している。13は小型の磨製石斧で刃部に使用による磨滅が認められる。図の上端側にも小さな打撃があり、一部が欠損している。素材の蛇紋岩は明灰色に黒が混じっており、近在のものと思われる。

剥片石器に使用される素材については、絶対数が少ないので量的な比率は出していないが、剥片や砕片を含めた全体の傾向では下呂石が多いことが特徴としてあげられる。木曽谷の遺跡では開田高原の柳又遺跡など旧石器時代以来下呂石が剥片石器の素材として用いられており、縄文時代後期以降の遺跡では特にその量が多くなる傾向がある。近年長門町鷹山遺跡の黒燿石採掘址の調査などにより、この時期にかなり大規模な黒燿石の採掘が行われ、消費地の遺跡に供給されたことが判明してきているが、木曽の遺跡では量的には少なくなっている。黒燿石の産出する八ヶ岳山麓より、下呂石の産出する下呂の方が近いという地理的な条件もあるが、上松町お宮の森裏遺跡（新谷1995）など縄文時代の古い段階の遺跡での黒燿石の供給量が多いことなどと合わせて考えると、時期による消費地と供給地の関係の変化もその背景の一つと考えることができる。

石器全体の組成では、大型の磨石類など縄文時代の一般的な石器組成からは欠落しているものが多い。遺跡自体の規模や立地、それに遺跡に残った石器が本来あった石器に対して占める割合などの諸条件を考慮しなくてはならないが、出土した器種が少ないことは注意しておきたい。

出土した剥片や砕片類をみると剥片石器の製作時にできる微細な剥片がほとんど見られないが、これは資料の多くが表面採集によるためであり、砕片などが存在することから遺跡で剥片石器の製作が行われていたものと思われる。

出土している土器の時期から、縄文から弥生へ移行する時期の社会的な変動などを背景とした石器組成のあり



第10図　石器（1～10：2/3，11～13：1/2）

方の変化をとらえることもできる資料であり、今後同時期の遺跡との比較等の作業を重ねて検証して行きたい。

C　灰釉陶器（第７図14～33）

過去に多量の破片が出土しているが、器形を復元できた物は少ない。またほとんどが細片のため個体数の算出や機種別の組成や数量比を示すことは不可能である。

このため時期別に区分した破片のうちで図化可能の物を示すとともに、各時期の遺物の概要について触れることとした。

時期別の分類は大明神遺跡の整理作業の際、田口昭二先生に指導していただいた物をそのまま用いている。

大原２号窯式期の遺物（第７図14～18）

細片まで含めて50点ほどの破片があり、碗５点を図示した。機種が判別できる物には他に段皿がある。

14は小型の碗で同一個体と思われる口縁から底部の破片８点から復元実測した。内面の各部分と外面の一部に細かい敲打の痕が残っている。破片を観察すると、接合した部分の打痕が一致しておらず、破損後の破片に何らかの目的を持って加工を行った物と思われる。敲打痕は直径３ミリ程度の物が密集しており、器面にかなり深く入っている物もある。灰釉陶器を転用して硯などにした物に見られる外形を調整するための敲打とはかなり異なっており、性格が注目される。また胴部の破損面には墨のような薄い付着物が認められる。15は高台を欠くが器形を復元できた。内外ともに細かいヒビが多く入っている。16は口縁から胴部の３分の１ほどが残存する。釉は内外ともわずかに斑状に残っている。

虎渓山１号窯式期の遺物（第７図19～23）

細片まで含めて90点ほどの破片があり、うち５点を図示した。機種が判別できる物には広口瓶、碗、皿、段皿がある。広口瓶は住居址から出土した破片とともに図化してある（第７図13）。

20は段皿で４分の１弱が残存する。内外ともに厚く釉が掛かり薄い緑色になっている。内面と高台の端部には重ね焼きの痕が残っている。23は碗の底部で高台の欠損した部分に厚く炭化物が付着している。灯明皿に転用された物と思われる。

丸石２号窯式期の遺物（第７図24～29）　細片まで含めて30点ほどの破片があり、うち６点を図示した。焼きが甘いやや軟質の物が全体の半数近くを占めている。機種が判別できる物には碗、皿があり、皿が大半を占める。

24は調査の際表土中から出土した。全体に大きなヒビが入っている。25は大桑小学校に保管されていた破片である。29は皿の底部で内面に朱墨が薄く付着している。図では明瞭な部分を示したが内面のほぼ全体に薄く認められ、この部分の表面が磨滅している。朱墨硯に転用された物と思われる。

西坂１号窯式期の遺物（第７図30～33）　細片まで含めて130点ほどの破片があり、うち６点を図示した。焼きが甘いやや軟質の物がほとんどを占めているため、他の時期に比べ細片化した物が多い。機種が判別できる物には碗、皿がある。図化した４点はいずれも軟質で、釉も流れた痕跡が残るか、ごく小さな斑状に残っている程度である。

このほかに時期の特定が不可能な細片が150点ほど出土している。全体を通してみると、既出遺物の大半は今回の調査で出土したものと比較して、焼きが甘く質の悪いものが多く、特に新しい段階のものではこの傾向が強く見られる。これは産地での製作工程が簡略化し、製品の質が低下したことを反映している。

また皿などの内面には磨滅が明瞭なものがあり、良く使いこまれていることが伺われる。

D　緑釉陶器（第７図34）

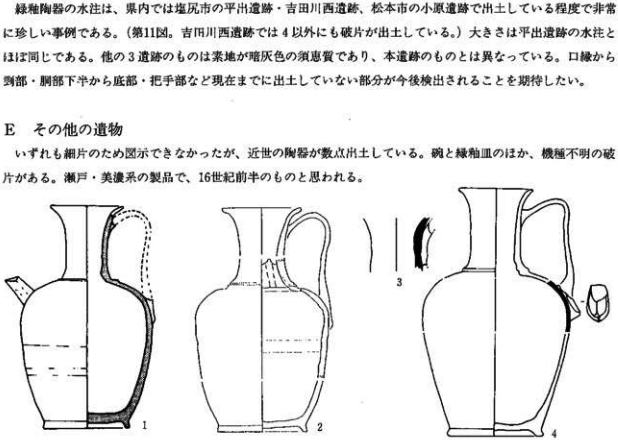
大桑小学校に保存されていた剄部の破片と、筆者が採集した肩から胴部の破片約10点より復元実測した。この両者には共通した部位の残存はないが、胎土が同じであり、肩の剄部に近い部分と、剄部の破片の表面の荒れ方が良く似ていることや、剄部と胴部上半の大きさから同一個体の破片と判断した。昭和63年に大明神遺跡の調査報告書を刊行した時点では破片が少なく器種を特定できなかったが、その後の採集資料との接合により、器形の復元が可能となり、把手付の水注であることが判明した。図化にあたっては、口縁や胴部下半などの残存していない部分は、塩尻市平出遺跡の水注を参考にしている。残存部から推定される大きさは剄部の付け根の径が78㎜、肩の部分の最大径が140㎜である。

剄部は下半部の約６分の１が残存している。外面の全体に厚く釉がかかっているが、表面は発泡して荒れている。内面には口縁側から流れた釉が筋状に残っているが、こちらも荒れている。肩部との接合の様子は、破損面が磨滅しているため観察できない。肩～胴部上半は10点ほどの破片があり、接合しない物が多いが、全体の約５分の１程度の量がある。全面に施釉されているが、破片によっては釉の一部、あるいは全体が剥落して失われている。残存している部分の釉は、やや薄い緑色で鮮やかに発色している。肩部の上面は非常に薄く作られており、剄部に近い部分の一部では、表面の釉が剄部と同様に発泡して荒れている。剄部の釉は発泡して飛んでしまっているが、胴部の残りの良い部分の発色は非常に美しい。把手の部分は図化できなかったが、口縁側の付け根の部分と思われる小破片が１点ある。注口の部分は出土していない。各部の大きさや形態は塩尻市平出遺跡の水注と良く似ている。素地の焼成は土師質で固く焼けしまっており、色は明るい褐色である。粒子は非常に細かく、長石の微粒子をわずかに含んでいる。

緑釉陶器の水注は、県内では塩尻市の平出遺跡・吉田川西遺跡、松本市の小原遺跡で出土している程度で非常に珍しい事例である。（第11図。吉田川西遺跡では４以外にも破片が出土している。）大きさは平出遺跡の水注とほぼ同じである。他の３遺跡のものは素地が暗灰色の須恵質であり、本遺跡のものとは異なっている。口縁から剄部・胴部下半から底部・把手部など現在までに出土していない部分が今後検出されることを期待したい。

E　その他の遺物

いずれも細片のため図示できなかったが、近世の陶器が数点出土している。碗と緑釉皿のほか、機種不明の破片がある。瀬戸・美濃系の製品で、16世紀前半のものと思われる。



第11図　県内出土の緑釉水注（S＝1/4）
1．平出，2．弓矢平和塔，3．小原，4．吉田川西

第４章　調査の成果

今回の調査では平安時代の住居址１軒が検出されたほか、縄文時代晩期～弥生時代前期の土器と平安時代の灰釉陶器が出土した。ともに従来知られていたものと同じ時期のもので、調査前の予想通りであった。しかし出土した遺物を整理してみると予想外のものがあり、大きな成果を得ることができた。

１　縄文時代晩期～弥生時代をめぐって

縄文時代晩期～弥生時代中期の遺構は、今回の調査では確認されなかった。調査で出土した遺物少なく、過去の表面採集による資料を中心に提示した。村内の遺跡からの出土例としては比較的まとまった資料であり、木曽谷への弥生文化の波及期の様相を知る上で貴重な資料と言えよう。

遺物の量が少ないことから、この遺跡で当時大規模な集落等が営まれていた可能性はなく、小規模な集落か、またはこの時期にみられる再葬墓などの遺構が存在したのではないかと思われる。

村内では平成３年度に調査した長野西地区の薬師遺跡や、同４年度に調査した長野中地区の名小路・善光寺遺跡（ともに現在整理作業を実施中）でこの時期の土器がまとまって出土している。また過去の出土例では野尻下在宮ノ原遺跡から出土した口縁と底部を欠く条痕文土器や、長野西のシシゴ沢Ｂ遺跡で出土した条痕文土器の口縁部の破片などがある。

これらは断片的な資料だが、弥生文化の木曽への波及期に、村内の各所に条痕文土器を持った人が入っていたことを示している。それらを見ると縄文時代後・晩期から人の生活が継続してみられる場所は大明神・薬師遺跡など限られた場所で、ほとんどの遺跡ではこの時期になって現れ、後へも継続していない。いずれの遺跡も規模が小さくて出土した遺物の量も少なく、長い期間生活が営まれていたとは考えづらいものである。

出土した石器の組成の中に直接稲作と関わるものがなく、むしろ石鏃など縄文時代の狩猟・採集を基盤とした生業形態の中に見られる要素が色濃いことは、彼らの生業の基盤が稲作ではなく狩猟や採集にあったことを示しており、この段階ではまだ縄文的な生業形態から弥生的な生業形態に移行していないことが何われる。

ほぼ同じ時期の茅野市大悦遺跡などの石器組成の中には、磨石類が残っていて、本遺跡のものとはやや異なっている。この違いは地域による弥生文化の波及のあり方や、受容以前の段階の生業の形態などの違いと関連したものと思われるが、明確にはできなかった。

推測の域を出ないが、これらのことからこの時期に入った人々は稲作の可能な新しい場所を求め、大桑の中ではもっとも広い長野の平のあちこちに住んだのではないだろうか。そうした中で本遺跡は、立地から遺跡での水稲耕作は不可能であるが、見晴らしの良い立地から、大明神遺跡のある殿の平や木曽川を視野に置きながら、長野の平の中で、新しく稲作を行うことが可能な場所を探索するための拠点という性格を考えられないだろうか。

この時期以降の弥生時代の遺跡は、村内では薬師遺跡で後期の住居址が１軒検出されている他は、大明神遺跡で数点の土器片が、また暮沼遺跡で廃製石鏃１点が出土しているにすぎない。波及期に長野の平の各地に入った人々も気候や地理的な条件の制約から稲作を基盤として定着することはできず、他の場所を求めて去っていったものと思われる。

この詳細については現在整理中の長野地区の遺跡の分析等の中で明らかにして行きたいと思う。

2　平安時代をめぐって

平安時代では住居址１軒が検出された。過去の出土遺物などからその存在は予想されていたものであるが、この時期の住居址は、村内では薬師遺跡に次いで２例目の発見である。村内の遺跡では灰釉陶器の出土は多く、美濃古窯で灰釉陶器の生産がはじまる時期以降に、相当多くの人が入って来たものと思われる。しかし住居址の検出例は少なく、当時の生活の様相を知る上でも貴重な資料と言えよう。

この住居で注目されるのは、床に近い部分から灰釉陶器の碗や皿が完形に近い状態でまとまって出土していることである。住居を焼絶する際に食膳具だけを床に近い部分にまとめて置いていることには、特別な意識があったのではないかと思われる。（煮沸具が残存しにくい素材のもので、同時に廃棄された可能性もある。）こうした事例は、県内の遺跡ではいくつか報告されているが、木曽の遺跡では初めてのものである。

木曽のこの時期の遺跡から出土する遺物を見ると、食膳具の灰釉陶器がほとんどで貯蔵用具や煮沸具の様相は不明である。食膳具として灰釉陶器が受容される段階以降の松本平の事例では、煮沸具が土師器の甕から羽釜などに変化する。今回の整理作業にあたっては既出遺物中の無文土器などを検討したが、土師器の破片は認められなかった。木曽の遺跡ではこの時期の住居址は、現在までに50例ほどが報告されているが、この時期の煮沸器具の出土事例はほとんどなく、また表面採集などで得られた遺物でも土師器の量は非常に少ない。このことには奈良時代の小規模な遺跡が近年になって確認されている以外、古墳時代から平安時代の美濃古窯での灰釉陶器生産の始まる以前の時期の遺跡が確認されていない木曽では、在地での土師器の生産が行われていなかったこと、鳥居峠より南が当時美濃の国に属していて、ここに住んだ人々が美濃から入ったと思われることが密接に関係しているものと思われる。

煮炊きに用いられる土器は常に火を受けており、食膳具よりは破損や劣化をしやすいと思われる。こうしたことを考慮すれば、その破片が全く出土しないことには別の理由があると思われる。ここでは土器ではなく鉄鍋などが煮沸具として使用されていた可能性を考えてみたい。

鉄鍋の場合、物理的な衝撃による破損の可能性は土器より非常に少ない。従って土器に比べて運搬が容易なため、別の場所へ移る際にも簡単に持ち去ることができたと思われる。また熱により劣化して破片となったものは、破片自体が脆くなっているため埋没した状態で長い時間残存することは困難と思われる。本遺跡の周辺は降水量が国内でも有数の多さであり、そうした点からも鉄製品の残存する条件は良くない。

松本平の遺跡では、この時期の鉄鍋の出土が数例報告されている。郡内の遺跡や、同様の灰釉陶器を主体とした食膳具の保有が予想される美濃地方の集落遺跡での鉄鍋の出土例が、管見の限りではなかったので検証することはできないが、これらのことを考えると煮沸具の鉄鍋と食膳具の灰釉陶器という組み合わせが、この頃の木曽で用いられていた生活用具のあり方だったのではないだろうか。今後さらに追求してみたい課題である。

既出遺物を含めた中で注目されるのは朱墨の付着した灰釉陶器や緑釉陶器の存在である。朱墨の付着した灰釉陶器は調査で出土したものと既出品に１点ずつある。いずれも朱の付着している面の器面が磨滅しているが、朱を溶くなどの行為によるものかは判然としない。朱墨は通常の墨のように固形で流通したものとは異なると思われ、これが付着した陶器はパレットのようにして使用されたものと思われる。

緑釉陶器は今回既出資料から器形を復元して図示することができた。県内では近年の調査で松本平などを中心に緑釉陶器の出土事例が増加し、出土すること自体は取り立てて珍しいことではなくなっている。村内でもこの遺跡以外に、昭和60年調査の大明神遺跡、平成３年調査の薬師遺跡で碗や皿などの破片が出土している。しかしこの遺跡で出土している水注は、項中で述べたように非常に貴重な事例である。

県内の他の遺跡の出土事例を見ると、水注など食膳具以外の緑釉陶器は、地域の拠点集落など通常よりは社会的に高い位置にあるものと思われる遺跡から出土している。またその性格は日用雑器として用いられたものではなく、祭器などの特殊な性格を持ったものであることが予想される。美濃の国に属していた木曽の本遺跡と、県内の他の遺跡との違いはあるが、そうした緑釉の持つ性格には大きな違いはなかったと思われる。

この遺跡に限らず、こうした特殊な製品は居住者が購入などの方法で入手したのではなく、何らかの恩賞などの形で与えられたものである可能性も想定できる。緑釉陶器の性格が祭祀用具であったとすれば、この遺跡の居住者は周辺の集落を含めた中でそうした役割を担っていた可能性もある。

県内では長野県埋蔵文化財センター・松本市教育委員会などによる松本平の遺跡群の発掘調査により、この時期の土器について詳細な編年が確立されている。

それによると美濃古窯の灰釉陶器の編年の１窯式が消費地の遺跡では数段階に渡って見られたり、前後の窯式の製品と共伴するあり方も明らかになってきている。平和塔遺跡をはじめ大桑村の遺跡の資料は、遺構単位でまとまってとらえられたものがほとんどなく、表面採集によって得られたものが多いという制約から、それらと同様の時間軸の中に位置付けて論じることは、現時点ではできない。ここでは美濃古窯址群の編年を時間軸とし、大桑村の遺跡での変遷を考えてみたい。

大桑村への灰釉陶器の入り方を見て行くと、その前の段階から継続して遺物が出土する遺跡は今のところなく、灰釉陶器を持った集団が他から入ってきていることがわかる。第１段階の光ヶ丘１号窯式期の遺物は、殿の大明神遺跡で出土しているのみである。第２段階の大原２号窯式期には、平和塔遺跡をはじめ村内の各地から出土している。これは第１段階に村内へ入った集団が、次の段階にはさらにその周辺へ拡大していったことによると思われる。

その後虎渓山２号窯式期、丸石２号窯式期、西坂１号窯式期の各段階では、殿地区の大明神遺跡・伊奈川地区の暮沼遺跡、それに平和塔遺跡などでは前の段階に引き続いて遺物の出土が見られるが、新たにこの段階になって遺物が出土する遺跡もいくつか現れる。このことからは、地域の中にいくつかの継続して生活が営まれた拠点的な遺跡と、そこから新たな場所を求めて周辺に広がっていった遺跡があったことが推定される。

弓矢平和塔遺跡は過去の出土遺物から継続して生活が営まれた遺跡であることがわかっているが、遺物の量はいずれの段階の物も数個体分の碗や皿などの破片にすぎず、おそらく一軒の住居での保有量か、それを下回る量であろう。他の拠点的な遺跡と比較するとその規模は非常に小さい。

しかしこの場所で継続した生活が営まれていることには、見晴らしの良い場所という特性が大きな意味をもっていたと思われる。弥生文化の波及した時と同様に新しい生活の場を求め長野の平へ入る際の拠点として、長野の平と殿の平を視野に置きながら、この場所で生活していたのではないかと思われる。

3　遺跡の立地をめぐって

本遺跡を考える上では、環境の項や各時代の考察の中で述べたように、非常に小規模な尾根上の平坦地に営まれている立地の特異性が注意される。この見晴らしの良い尾根の先端の平坦地は、他の地域なら古墳が築かれていてもおかしくないような場所である。陽当たりが良く、見晴らしの良い場所ではあるが、水を得るのには少し離れた場所に行かなくてはならず、生活の基盤となる食料の栽培や採集を考えると、山の植物を採集したり動物を捕ったりすることを除いては困難な点が多い。現在平和公園がある部分や、今回の調査地周辺の現在畑などに利用されている部分を耕作地として利用すれば小規模な集落の生活は営めたかもしれないが、それにしても周辺の平地に比べると条件は良くない。なぜ彼らはこの場所にこだわったのであろうか。

大明神遺跡のある殿の木曽川に面した平から長野の平を望んでみると、平の南東側に延びるかなり広い部分を望むことができる。しかし南側の関山と東側の平和塔遺跡のある関山に阻まれて、長野の平のうち南西側の現在の長野西地区のほとんどは見ることができない。

現在までに中山の東側の長野東地区では、南東側の中地区から続く平の部分以外では平安時代の遺跡は確認されていない。中山の東側の部分ではサヨリ沢の氾濫などによる埋没のために遺跡が確認できない可能性もあるが、南側の山から続く長野西から中地区の広い平に比べると、サヨリ沢の両岸の東地区の平が狭いことや、西側に中山があることによる日照時間の短さなどが、集落を営む際の制約になっていると思われる。平安時代の長野地区での集落の展開は西から中地区に中心があったものと思われる。この地区を見渡せる本遺跡の立地は、やはりそれらと密接な関係を持っていたと考えておきたい。これに対して中世以降の居住者等に関する伝承などが、中山の東側に集中していることは注意されることである。それらについては伝承自体の再検討を含めて、今後検討して行きたい課題である。

大桑村に限らず木曽では、平安時代に関する文献資料は非常に少ない。古代から中世にかけての木曽については、現存する建築物などや地名と伝承とを安易に結びつけたような説が、無批判のまま受け継がれ、ともすれば定説化しつつある。これらについては原点に返って検証し、真の姿を見いだして行かねばならないと思う。

今回の調査で得られた資料は決して多くはないが、それらを考えて行く上では、重要な意味をもつと思われる。少ない資料から、無理に組み上げってしまった感もあるが、前に上げたことに向けての一歩となれば幸いである。

この遺跡が村の平安時代の中で、そして木曽の中で占めていた位置については、今後さらに調査を重ね、追跡してみたいと思う。

公園造成部分にあった遺跡は、本書の記録を残して造成時に湮滅したが、周辺の畑として利用されている部分などには、まだ遺跡の大半が残っている。その一部は耕作の際の深耕や、雨等による斜面の表土の流出などにより失われつつある。今後それらについても注意し、保護につとめたいと思う。

調査から本書の作成までには、多くの方よりご教示・ご協力をいただいた。末筆ながらお礼申し上げ、結びとしたい。

参考文献

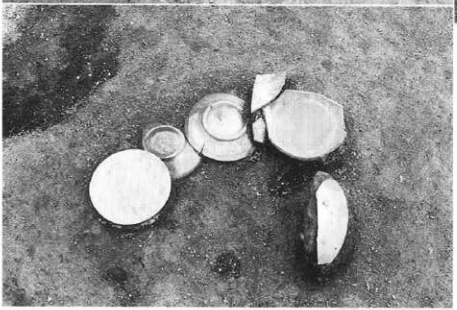
田口昭二　1983　『美濃焼』ニューサイエンス社
竹原　学ほか　1987　『松本市赤本山遺跡群II』松本市教育委員会
細口喜則　1987　「北陸西部における縄文時代後・晩期社会構造の諸問題」『立正考古』28　立正大学考古学研究会
新谷和孝　1988　『大明神遺跡』大桑村教育委員会
直井雅尚ほか　1988　『三間沢川左岸遺跡（I）』松本市教育委員会
原　明芳　1988　「長野県の９世紀後半から12世紀の食膳具の様相」『長野県埋蔵文化財センター紀要２』
原　明芳ほか　1989　『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書３　吉田川西遺跡』長野県埋蔵文化財センター
原　明芳　1990　「借淵の緑釉陶器」『緑釉陶器の流れ』三重県埋蔵文化財センター
小平和夫　1990　「古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書４』長野県埋蔵文化財センター
中沢道彦　1991　「長野県の概要」『東日本における稲作の受容』東日本埋蔵文化財研究会
田口昭二ほか　1993　『美濃窯の焼物』多治見市教育委員会
細口喜則　1993　『北陸における縄文時代文化の研究』石川県中島町
新谷和孝ほか　1994　『氾濫』大桑村教育委員会
百瀬長秀　1994　「浮線文期遺跡分布論」『中部高地の考古学IV』長野県考古学会
新谷和孝　1995　『お宮の森裏遺跡』上松町教育委員会
百瀬一郎　1995　『大悦遺跡』茅野市教育委員会
竹原　学　1996　『小原遺跡III』松本市教育委員会

写真図版１

1〔左上〕　遺跡遠景〔北西より〕
写真中央の尾根の先端の塔の付近が遺跡。
手前が弓矢地区の集落。奥には長野の平が拡がっている。

2〔右上〕　遺跡遠景〔南より〕
中央重機の奥が調査中の遺跡。
左側中央の切り取りの白い部分は、木曽川泥流の礫層。

3〔左下〕　遺構検出作業〔西より〕
調査地は尾根の頂部から周りに向かって下る、緩い斜面になっている。

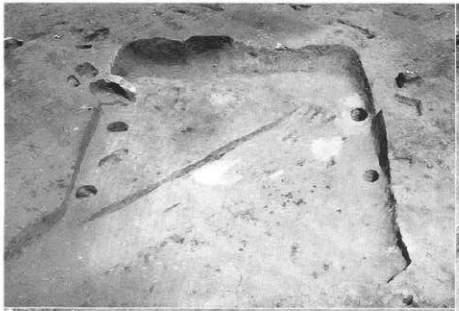


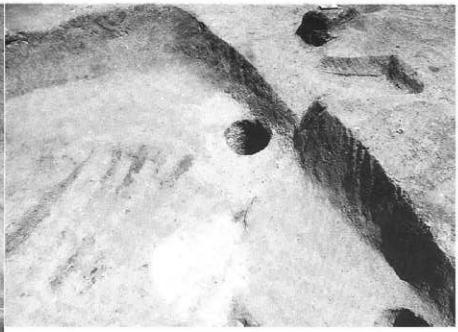
4（左上）　第1号住居址遺物出土状況（南より）
左奥のカマドの周辺と、右側の中央部から灰釉陶器がまとまって出土している。

5（右上）　同カマド付近遺物出土状況（南より）
カマドの構造材の石と、灰釉陶器が出土している。
写真の左側は木の根による撹乱を受けている。

6（左下）　同中央付近遺物出土状態（南より）
床の直上から皿3点と碗（右端）がまとまって出土している。

写真図版 3





7〔左上〕　第１号住居址完掘状況（南より）
左奥の壁は、本来の物よりやや奥まで掘っている。
中央の対角線に試掘溝がかかっている。

8〔右上〕　同東側柱穴完掘状況（南より）
風化した花崗岩（白い部分）を削って柱穴を掘っている。
床や壁もこの花崗岩を削っている。

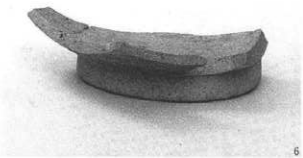
9〔左下〕　同カマド完掘状況（南東より）
中央部及び壁の外の穴は、木の根による撹乱。
写真右側は袖が良好に残っている。

写真図版 4

1

2

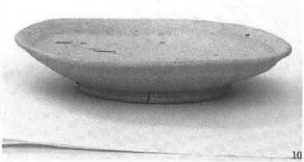
4


6

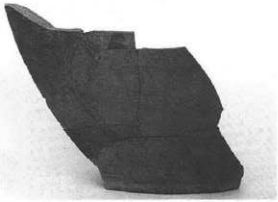
7

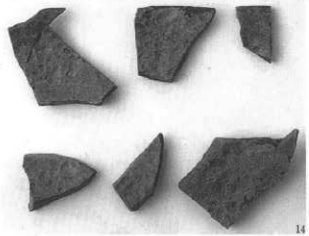
8

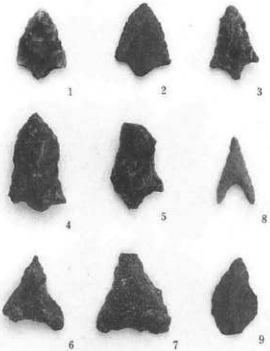
9

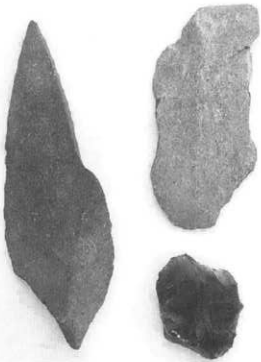

10

11



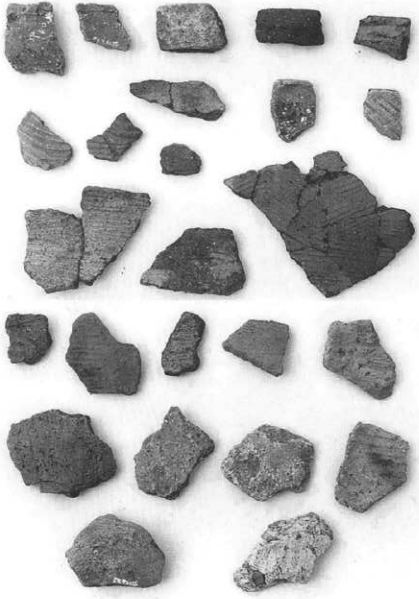


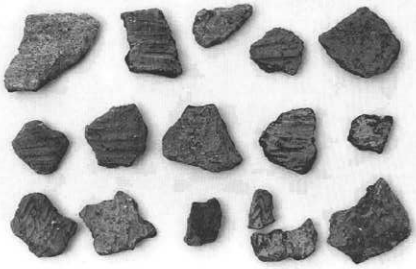




No25　既出石器　弓矢・藤山氏蔵（左、長さ14.5cm）

写真図版 6





No26　左上　1b・1a・2・3・6
7・4・5
11・10・12
13（2点）・14

No27　右上　16・15・8・20・9
19・18・17・22・23
24・25・29・26・27・28

No28　左下　50・34・40・32・31
56・57・59・46
55・52

弓矢平和塔遺跡報告書抄録

ふりがな	ゆみやへいわとういせき
書名	弓矢平和塔遺跡
編著者名	新谷 和孝・羽根田 勉
編集機関	大桑村教育委員会
所在地	〒399－55 長野県木曽郡大桑村長野2778 TEL (0264) 55－3080
印刷年月日	1996年3月26日
発行年月日	1996年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
弓矢平和塔 (ゆみやへいわとう)	長野県木曽郡大桑村長野 (ながのけんきそぐんおおくわむらながの)	204307	5	35°41′2″	137°40′0″	1995年4月6日～5月31日	570㎡	公園整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
弓矢平和塔 (ゆみやへいわとう)		縄文時代晩期～弥生時代前期、平安時代	平安時代住居址1	縄文時代晩期～弥生時代前期土器、石器、灰釉陶器 特殊遺物 緑釉水注	縄文時代晩期～弥生時代前期、平安時代の小規模な集落。 緑釉水注(既出品)は県内でも出土事例の少ない貴重なもの。

弓矢平和塔遺跡
—平和公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告書—

発行日 平成8年3月31日
発行者 大桑村教育委員会
木曽郡町村会
印刷 ほおずき書籍株式会社
〒381 長野県長野市柳原2133-5
☎ (026) 244-0235㈹